

2025（令和7）年度 国際版画美術館 事業報告書【展覧会版】

展覧会名	日本の版画1200年―受けとめ、交わり、生まれ出る			担当者名	町村悠香・宮崎黎		
会期	2025年3月20日（木・祝）～6月15日（日）			開催日数	76日間		
協賛・後援・協力	なし						
巡回館	なし						
展覧会概要	日本現存最古の印刷物である無垢浄光大陀羅尼経（むくじょうこうだいにきょう）から、仏教版画、絵手本や画譜、浮世絵、創作版画、新版画、戦後版画、現代版画へと連なる約240点を当館収蔵品から厳選して紹介。特に他の東アジアの国々とのつながりにも注目し、文化交流の視点で日本の版画1200年の歴史を紹介した。						
ねらい・対象	2024年に発行された新札の絵柄に葛飾北斎の作品が使われるなど、浮世絵を代表とする日本の版画はナショナルなイメージ結びつきがちだが、浮世絵も西洋や中国の影響を受け生まれたものである。文化交流の視点で当館収蔵品をキュレーションすることで、1200年に及ぶ日本の版画史を新たな切り口から語ることを目指した。						
関連催事	催事名		開催日	タイトル	講師等	参加者数	
	記念講演会		5月18日（日）		山口晃氏（画家）	130人	
	こどものための鑑賞会		4月16日（水） 5月17日（土）	0歳からの版画美術館！親子で鑑賞 & 版画あそび	富田めぐみ氏 （NPO法人赤ちゃんからの アートフレンドシップ協会 代表理事）	21人	
	子ども講座 ―みてみてつくろう―		3月29日（土）	思いをこめて☆版画でふやす《大切なもの》	杉浦幸子 （武蔵野美術大学教授） 上村牧子 （普及担当学芸員）	15人	
	復刻浮世絵版木摺り体験 2025		5月24日（土）		渡邊利江 （普及担当学芸員）	20人	
	プロムナード・コンサート		6月14日（土）	日本の版画と若き響き	桜美林大学芸術文化学群 玉川大学芸術学部	175人	
	ギャラリートーク		①4月5日（土）、 5月17日（土） ②3月23日（日） ③3月30日（日）、 5月3日（土）	①1～3章 仏教版画、浮世絵を中心に ②3～5章 新版画、創作版画を中心に ③5～7章 創作版画、戦後・現代版画 を中心に	①宮崎黎 （担当学芸員） ②滝沢恭司 （新潟市美術館特任館長・ 元担当学芸員） ③町村悠香 （担当学芸員）	181人	
観覧料	一般	大・高生	中学生以下	無料日			
	800 円	400 円	無料	・初日：3/20 ・開館記念日：4/19 ・シルバーデー（満65歳以上無料）：3/26、4/23、5/28			
観覧者数	有料計		無料計	総観覧者数	内、一般	内、大・高生	内、中学生以下
	8,624 人		3,657 人	12,281 人	11,149 人	802 人	330 人
	目標値		12,903 人				
主な収入	観覧料収入		図録販売収入	受託販売収入	その他の特定財源		
	5,658 千円		1,493 千円	1,223 千円	― 千円		
事業経費	・講師謝礼 ・事業協力謝礼 ・著作権使用申請委託料 ・設置・撤去委託料 ・作品額装委託料 ・広告・宣伝委託料 ・ポスター等作成委託料 ・ディスプレイ作成委託料 ・イベント企画運営委託料				45 千円 147 千円 ― 千円 720 千円 697 千円 1,017 千円 3,501 千円 1,188 千円 ― 千円	7,315 千円	
主な広報・取材等	【テレビ】「日曜美術館 アートシーン」（NHK Eテレ）他 【新聞・雑誌】『女性自身』、『江戸楽』、『散歩の達人』、『月刊美術』、『BM（BIJUTSU NO MORI）』、『新美術新聞』、『日本教育新聞』、『東京新聞』他 【ウェブ】「美術展ナビ」、「美術手帖」、「Fashion Press」、「IM（インターネットミュージアム）」 他						

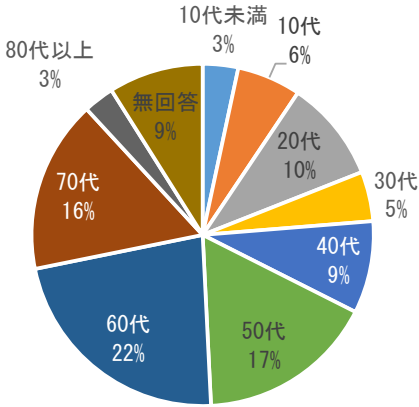
	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)		
					企画の内容	展示作品	展示の仕方等
アンケート結果	447 件	5.8 %	22 %	63 %	97.3 %	97.5 %	80.8 %
	主なご意見	別紙参照					
工夫と反省点、改善方法	予備調査	<p>2023年1月頃に展覧会のテーマを決定し、章構成と出品作品についての検討を開始した。1200年という幅広い時代を扱うため、担当2名だけでなく、近代版画専門の学芸員・滝沢恭司と浮世絵専門の大久保館長も加わった協力体制を作り、月1度程の企画会議を開いて準備を進めた。</p> <p>1章に関しては、元当館学芸員で仏教版画を専門とする佐々木守俊氏（清泉女子大学教授）が調査段階から関わった。佐々木氏の協力のもと、近年はまとまった展示の機会が少なかった仏教版画コレクションを改めて調査し、展示に結びつけることができた。特に「印仏」は子ども講座のテーマになり、来館者の評判もよかった。</p>					
	作品選択	<p>企画会議で協議のうえ以下の7章構成とした。「1章 版と祈り—日本版画のあけぼの」「2章 出版文化の隆盛—拡散するイメージとその受容」「3章 変わり続ける浮世絵—舶来文化の吸収と再創造」「4章 創作版画と新版画—両洋の眼・浮世絵の超克」「5章 版画誌がつなぐネットワーク—日本と中国の「創作版画」」「6章 占領下における新しい版画の胎動—中央と地方、モダニズムとリアリズムの往還」「7章 「国際版画展」の季節—「版画の国」を広め育てる」。</p> <p>章構成を決めた後は、章ごとに分担して作品選定を行った。第1章～3章は宮崎（1章は佐々木氏協力、3章は大久保館長協力）、4章は滝沢、5～7章は町村が担当した。多様な主題、形状、技法、出自を持つ作品を選ぶことで、ボリュームはあるが飽きさせない展示内容とすることを目指した。また、もの、イメージ、人の交流の軌跡が分かりやすくなることを心掛けた。</p>					
	図録	<p>B5変形192頁の展覧会図録を作成した。作品解説は学芸員3名と館長、佐々木氏で分担して執筆した。佐々木氏には仏教版画のコラム執筆も依頼し、創作版画と中国との文化交流に関するコラムは陳琦氏（当時・東京大学博士課程、現・廈門大学助理教授）に執筆を依頼した。表紙は当館収蔵庫で実際に作品を並べて撮影した写真を使用し、本展が収蔵品で構成されていることを視覚的に伝わるよう工夫した。</p>					
	広報	<p>歌川広重の『東海道五十三次之内（保永堂版）』をメインビジュアルに使用し、市内公立小中学校、各地区センター、全国的美術館など約700カ所に広報物を送付した。広報画像には広重のほか葛飾北斎、川瀬巴水、棟方志功など当館を代表する名品と、蘇州版画、版画誌『現代版画』など文化交流の軌跡が分かる隠れた逸品の両方を使用した。これにより名品を楽しみたい層と、版画史の奥深さを知りたい層の両方にアピールしようとした。</p>					
	宣伝	<p>関心に添ってターゲットिंगがしやすいFacebookを活用して有料広告を出稿した。アンケートによると、各種のウェブ経由で展覧会情報を知りに来館した者のほか、家族・知人からの口コミによる来館者が多かったのが特徴だった。来館者数は会期全体で安定して推移し、会期半ばでNHK Eテレの「日曜美術館 アートシーン」で取り上げられたことで、会期末に向けて入場者数が増加した。</p>					
	ディスプレイ	<p>和本や版画誌など冊子体の作品が多く、展示レイアウトや設営作業を工夫する必要があった。展示ケースを用いて自然な導線を確認しようとしたが、一部には導線が分かりにくいという声もあった。解説パネルは丁寧な内容を心掛けたが、歓迎する声ともう少し短くてよいという声に二分された。キャプションの文字サイズの小ささを指摘する声が散見されたので、今後に生かしたい。こども向け解説パネルを各章に1枚以上つくり、鑑賞の手助けとなるように作品の見どころを解説した。学生や一般客にも好評だったため、今後も継続していきたい。</p>					
	イベント	<p>山口晃氏の講演会は人気で予約開始とともに満席になり、当日も大いに盛り上がった。こども向けイベントを積極的に開催し、こどものための鑑賞会、子ども講座—みてみてつくろう—（普及担当が実施）は、どちらも定員に達した。担当学芸員によるギャラリートークは企画、作品選定に関わった各学芸員が自分の担当パートを中心に話すことにし、合計5回行うことができた。また、当館と同じ美術館課の整備担当が企画したイベントとの協同企画として、展覧会出品の浮世絵作品をモチーフとしたイラストをネルノダイスキ氏に作成していただいた。同イラストについては、展覧会関連事業として美術館内でも掲示をおこなった。</p>					
	団体見学・学校対応	<p>日本の版画史を通史的に理解できる機会なので、積極的に大学への団体見学の呼びかけを行い、主に美術大学の版画研究室が団体で来館した。5校(女子美術大学、東京造形大学、多摩美術大学、実践女子大学、筑波大学)8件約300人が訪れ、若年層へのアプローチと教育機会の提供につながった。</p>					
その他特記事項		<p>本展は開館以来当館で学芸員を務めてきた滝沢恭司（現・新潟市美術館特任館長）が関わる最後の展覧会となった。企画会議では開館以来の展覧会や当館の顕著なコレクションについてアドバイスを受け、3万3000点に及ぶ当館のコレクションを活用していくには学芸員の長年の蓄積が必要であることを改めて認識した。今年度から収蔵品管理システムの運用が始まったため、システムを活用しながら、学芸員間でのコレクション知識の継承をおこなっていききたい。</p>					

2025（令和7）年度 国際版画美術館 アンケート集計結果【日本の版画1200年】

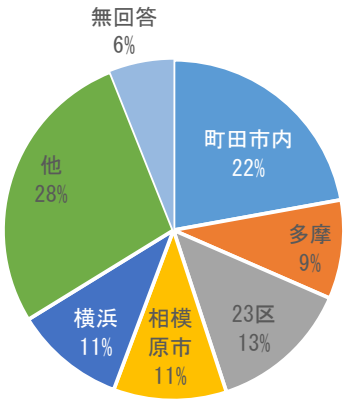
開催期間：2025年3月20日（木）～6月15日（日）

回答者数： 447 人（総入館者数：12,281人 アンケート回収率： 5.8%）

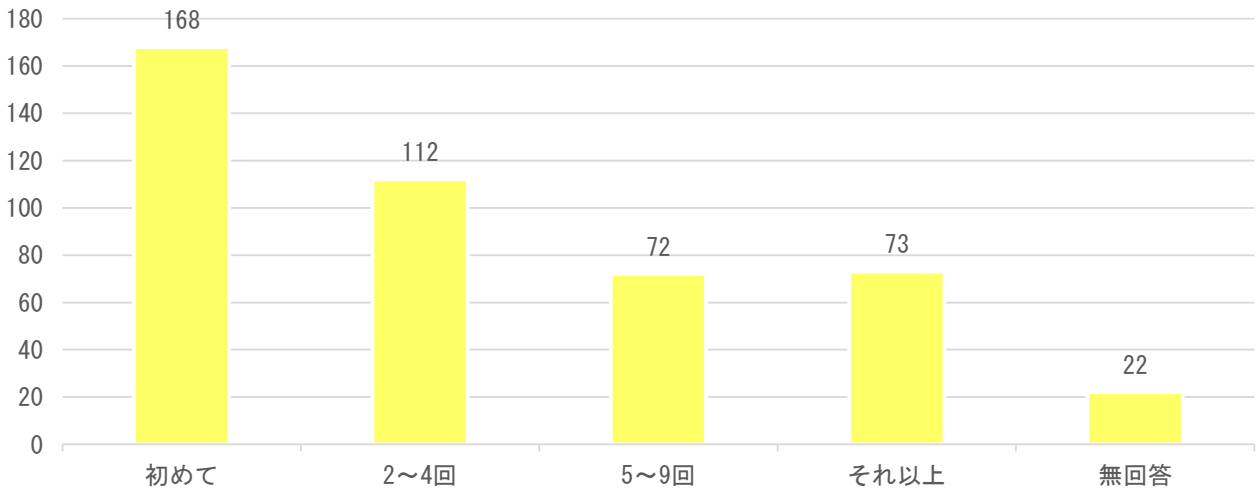
1. 年齢層



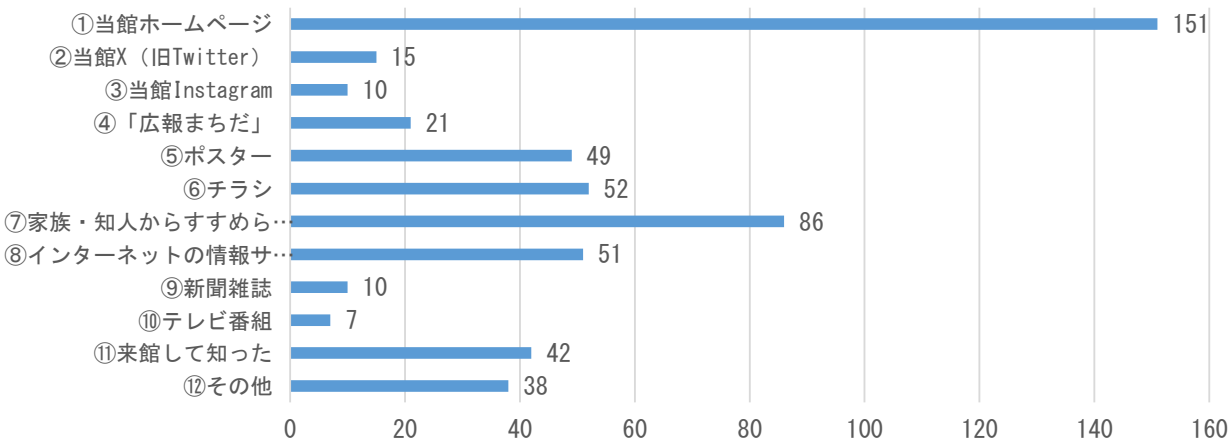
2. 住まい



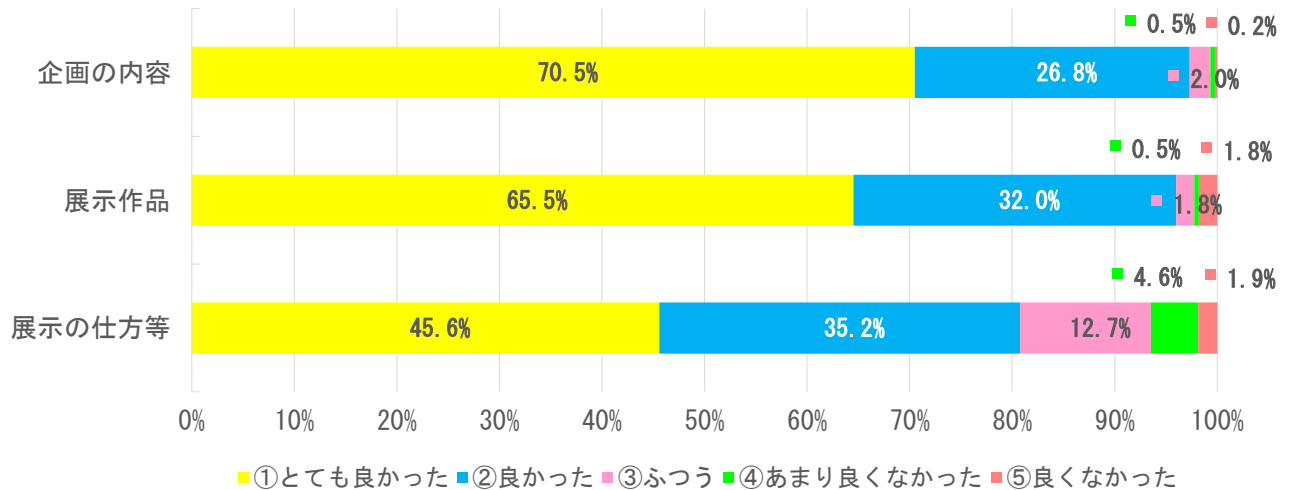
3. 来館回数（人数）



4. 展覧会情報の入手（人数）



5. 回答者の満足度



6. 主な意見・感想

◆日本の版画の歴史が全て見られるような時代ごとの展示には驚かされた。これまで何度も見た作品も多かったが、有名版画家の作品で見たことのなかった作品もあり興味深かった。

◆日本版画というと浮世絵をメインに展開されることが多いですが、印仏（版画のはじまり）から、各国の版画と合わせて歴史を辿れることで、各国の影響のあり方や「版画」というジャンルに対する見方が変わったように思います。

◆たまたま町田駅でチラシを見つけて、6才・5才の子供達といっしょにフラッと立ち寄ってみました。久しぶりの美術鑑賞timeに母は満足でした。絵画教室に通う息子は版画をさせてもらったこともあるので興味を持って見てくれた様子でした。子連れで駆け足でしか見られませんでした。ほど良いボリュームで

とても楽しませていただきました。また訪れたいと思います。

◆町田市に住んでいながら初めて来ました。とても良い企画でまた来たいと思います。

◆時代を横断して一度にみられるのがよかった。大きさ（「こんなに大きいのか」「小さくて細密」など）が

わかるのが現物を見る良さだと改めて感じました。

◆大胆なテーマと詳細な調査で、さすがだと思いました。ギャラリートークも楽しく、鑑賞が何倍も楽しくなりました。

◆学校作品やほかのさくひんやいろいろさくひんとかがきれいで、まだ二回しか行っていないので、たくさんいったりしたいです。ほかのさくひんがかざられるのを楽しみにしています。きょうのえはすごかったりしたりしました。かざりかたやさくひんを見えやすいようにライトが上にあるのをきずきました。さくひんにせつめいがかいてあったりして、とてもべんりだと思いました。

（以下は要望等の意見）

◇撮影シャッター音が気になりました。他館ではマスキングテープで音が出るところをふさぐようにしているところもあります。写真撮影OKの作品が多いのはうれしいのですが、今後ご検討いただけたら幸いです。

◇テーマも内容もとてもよいのですが、説明したいことが多すぎて、読む方に目がいて疲れてしまいました。

大きいパネルがみやすかったのも、まとめてもよいかもです。

説明の文字が小さい。会場は暗く、照明の関係か影になりやすいので、老眼には厳しい。